

## 新学術領域第4班研究会「戦時期日本の喇嘛教・回教工作」概要

日時：2012年12月1日（土）13時30分～18時

場所：東京理科大学 PORTA 神楽坂7階第3会議室

出席者：58名

### セッション1 大陸における対「喇嘛教」活動

発表1：高本康子（北海道大学）

「日本人と「喇嘛教」—満洲国における「喇嘛教」工作を中心に—

発表2：リ・ナランゴア（オーストラリア国立大学）

「日本仏教の内モンゴルにおける活動」

討論者：広川佐保（新潟大学）

司会：島田美和（慶應義塾大学）

### セッション2 中国・東南アジア地域における回教工作

発表1：安藤潤一郎（東洋大学）

「日中戦争期の中国大陸における日本の回教工作と回民社会—華北を中心に—

発表2：小林寧子（南山大学）

「日本の回教工作の展開と帰結—インドネシアを中心に—

討論者：松本ますみ（敬和学園大学）

司会：宇山智彦（北海道大学）

### 全体討論

司会：長縄宣博（北海道大学）

本研究会は、主に日中戦争開戦以降の昭和期を中心に、日本人が主体となって行われた宗教工作について、現時点における研究成果の整理と、今後の論点とするべき課題の析出を、対チベット仏教、および対イスラームの諸活動という観点から試みたものである。

第1セッションでは、「大陸における対「喇嘛教」活動」と題し、高本康子が主に旧満洲国、リ・ナランゴア氏が同様に蒙古連合自治政府治下の内モンゴルについて、報告を行った。高本報告では、明治以降における「喇嘛教」と日本のかかわりが振り返られ、続いて、満洲国建国以降の宗教政策の一環としての「喇嘛教」工作について、満洲国中央での施策として、チベット仏教寺院組織の「宗団」への再編および僧侶への度牒交付制度を中心に、その概要が説明された。その上で、地方レベルの工作活動として、興安北省の廟会工作および熱河省承德の大蔵経出版・寺院修復の二事例が紹介された。ナランゴア報告では、まず、日露戦争以降のモンゴルにおける日本仏教各派の動きが総括され、その上で特に真言宗に注目し、高野山および東京での留学生の受け入れ・研究所の設置、モンゴル現地における布教所・別院の建設など、活動の詳細が紹介された。それとともに、当時の高野山における予算内容の移

り変わりから、対「喇嘛教」活動の位置づけが試みられ、太平洋戦争開戦前後から日本の宗教政策が「南方」へと志向を転換する中で、高野山においてモンゴルにおける活動が持った重要性が検証された。

これに対し、広川氏及び会場から、以下のコメントが出された。すなわち、①工作を行う日本人の認識において、現地の宗教および、自らの工作活動がどのように把握されていたか。また、②現地のモンゴル人の認識における「近代」と、いかなる関連性を持つか。具体的には、寺廟経済の衰退と、高等教育を受けた人材の出現による、知識階級としての僧侶の社会的地位下落が、どのように捉えられ、「喇嘛教」工作に対する態度にどのように影響したのか。また、モンゴル人自身の「喇嘛教」改革、「喇嘛教」の近代化として、具体的にどのようなものが想定されていたのか。以上の問題点に加え、日本側では高野山をはじめとする仏教関係資料、モンゴル側では当時のモンゴル語メディア等に対するさらなる調査の必要性が指摘された。

第2セッションでは、「中国・東南アジア地域における回教工作」と題し、安藤潤一郎氏が主に中国、続いて、小林寧子氏が同様にインドネシアについて報告を行った。安藤報告では、まず、中国における「回民」が持つ由来が紹介され、更に、日本人とイスラームの関係が、「回民工作」の経緯を中心として、日露戦争前後から振り返られた。続けて、日中戦争期における日本の回民工作が概括され、「対中国」といった統一的な枠組みなしに、華北、蒙疆、江南、華南、満洲国といった個々の地域において別個に、回民の組織化と動員が図られた点が、その特徴の一つとして指摘された。その上で、中国華北での工作活動が、「中国回教総聯合会」を中心に詳細に紹介された。小林報告ではまず、明治期以降、日本人が「回教」に対して持った認識について、「回教」という表現が定着する過程、および東南アジアのムスリムに関心が向けられていく経緯が振り返られた。その上でインドネシアを事例として、占領地における日本軍の回教工作の案出・実施過程と、現地ムスリム側の対応が、植民地末期から戦後1970年代までの連続性を視野に入れつつ、詳細に紹介された。

以上に対し、第1セッションの発表もふまえ、松本氏および会場のコメントとして以下が出された。すなわち、①現地における教育および宗教の近代化が、日本人の宗教工作に、どのように関連していくのか。また、②これらの宗教工作における、例えば欧米の基督教宣教師の活動等、参照例となるものの有無。更に、③「宗教」に対する日本人の態度の相違と、工作活動との影響関係。例えば、「仏教」という、いわば同じ信仰を彼此の共通項とすることができる「喇嘛教」工作と、そうではない回教工作の場合において、両者の相違のありようはいかなる意味を持つか。また、工作者としてイスラームに接していくうちに改宗した日本人の事例において、その思想的変遷をどのように解釈するべきか。これらに対し、例えば①について安藤氏が、日本の回教工作は、現地における「近代化」の要求と、ある程度同調して進まざるを得ず、また同調したからこそ一定の効果を持ち得た、との見方を示した。

続く全体討論においては、司会の長縄宣博氏から、いくつかの論点が提示され、会場を含めた議論となった。その内容は、以下3点に整理される。第一は、「近代」をめぐる、現地と

日本の接触のありようであり、第1・第2セッションから引き続き、本研究会における一貫した焦点となった。第二は、「宗教」の扱いに関してであり、例えば宗教そのものへの目配り、すなわち、このような宗教工作および宗教行政が、宗教の教義や組織などにもたらした影響の有無等について考察する必要性が示唆された。第三は、工作活動における、各個人と組織・機関の活動との関係のありようであり、例えば、当時「蒙古通」、「支那通」と呼ばれた日本人や、また、現地の対日協力者が果たした役割、および、彼らが日本軍、現地行政当局、各宗教団体との間に持ち得た位置関係について、よりきめ細かく把握する必要性が繰り返し指摘された。これに対してはナランゴア氏が、内モンゴルの工作活動においては、まず仏教者の有志が単独で現地に入り、ある程度の時間をおいてその活動を宗派組織が追認して引き継ぎ、更にその活動成果を、日本軍もしくは現地行政が工作に利用する、というパターンが見られることを、事例として示した。

以上のように、本研究会においては、対「喇嘛教」、回教工作活動の研究成果を比較対照する試みを通じ、今後帝国日本の宗教工作研究で取り組まれるべき諸課題が明らかにされたと言える。

(文責：高本康子)